



見事にゾウを操る筆者

## 1日体験コースから キャンプありの6日コースまで

ラオス北部、町全体が世界遺産に登録されているルアンパバーンの郊外に誰もがゾウ使いさんになれる場所があります。

ゾウの背中に乗ってのんびり散歩するだけのツアーは、アジア各国に数多く存在しますが、ここでは訪れた人がマホートと呼ばれるプロのゾウ使いさんにゾウへの指示の出し方やゾウの世話を教えてもらえるのです。

しかも、気軽な1日だけのコースから、ジャングルの中のキャンプを含む6日間コースまでと、さまざまなコースがあり、

ゾウと一緒に過ごす時間が長いのが他とは大きく異なる場所です。一般の人がここまでゾウと密接にコミュニケーションができるのは、おそらくここだけではないでしょうか。

ルアンパバーンの町中から車で20分ほどの距離にあるのが、ムーア・ロッジと呼ばれるゾウ使いキャンプです。ご存じのようにルアンパバーンは町の規模が小さく、車を10分も走らせるとたちまち山々が連なる田舎道が姿を現します。ムーア・ロッジの周辺も森とカン川に囲まれたのどかな環境です。今回は併設されたエコ・ロッジに宿泊して2日間のゾウ使い体験をしてきました。

## ラオスの古都ルアンパバーン ゾウ使い体験レポート

ゾウに乗るだけのツアーはアジアで数多く存在します。でも、自分が「ゾウ使い」になれたとしたら？ゾウ使いなので、自分でゾウに指示を出さなければなりません。果たしてゾウさんは指示に従ってくれるのか？ラオス担当スタッフが体験してきました。

ピース・イン・ツアー ラオス担当：阿部直樹

到着して早々にゾウさんにご対面。ゾウ使い体験を始める前に、プロのゾウ使いさん（マホート）のお手本を見せてもらいます。マホートさんはゾウの首の上に跨り、自分はゾウの背中の上に取り付けられた椅子に腰かけて、1時間ほど周辺のジャングルを散歩します。ラオスには手つかずの自然が多く残っていますが、ロッジ周辺はまさにそうした場所、鬱蒼としたジャングルのなかをゆつくりと進んで行くので雰囲気たっぷり。このときは雨季だったこともあり、地面はぬかるみ、椅子も大きく揺れたのでスリルがありました。

素晴らしいロケーションと堂々たるゾウの足取りにすっかりはしゃいでしまいまし



ぬかるんだ坂道を下るのは迫力満点！



背後には岩山がそびえ立つムーア・ロッジ



担当するゾウのペーンちゃん



首の上に登るのがひと苦労



言うことを聞いてね



食欲旺盛なペーンちゃん。サトウキビがいくらあっても足りません。

たが、マホートさんの言動に注目してみると、何やらゾウに言葉をかけて指示をしているようです。聞いてみると、ラオス語で「進め」「右へ」と言えば、ゾウは理解できるというので驚き！果たして自分のラオス語の指示は通じるだろうかとワクワクしてきます。

また、マホートさんがゾウの耳の裏を両足でペチペチと軽く叩いているのも気になります。

ました。これはあとで説明しましょう。  
**「百万頭のゾウ」の王国**  
**ラオスとゾウの長い歴史**

ところで、アジアゾウとアフリカゾウの違いはご存じでしょうか？大きな三角形の耳に鋭い牙を持つのがアフリカゾウです。一方、インドから東南アジアに生息するのアジアゾウで、小さな耳と短い牙、そして

て丸っこい背中が特徴です。気性の荒いアフリカゾウに比べ、アジアゾウは人間に従順な性格で、初めてのゾウ使い体験にも向いているのだそうです。

ラオスには現在のルアンパバーンの地を都として、14世紀半ばから18世紀初頭までラーンサーン王国（「百万頭のゾウの王国」という意味）という強大な王国が存在したほどですから、ゾウとの関わりは歴史的にも深いものがあります。

しかし、国内の野生のゾウは減少の一途をたどり、2003年の統計によると500頭から1000頭と推定され、その生息地はメコン川西岸のサイニャブリー県、ヴィエンチャン県郊外のPhou PhanangとPhou Khao Khoay、サノンナケート県の一部地域、カンボジア国境付近、ベトナム・中国との国境付近のNam Et、Nam Xam、Phou Dendin、Nam Haなどに限られています（※1）。このロッジにいる13頭のゾウも、ほとんどがヴィエンチャン郊外から保護さ

※1：International Union for Conservation of Nature and Natural Resources (<http://www.iucnredlist.org/>)



「ブンブン（噴水）」 気持ちいい！



ペーンちゃんと一緒に入浴して体を洗ってあげました

の20代女子？ 人間に置き換えると親近感が湧きますね。

自分ひとりだけでペーンちゃんの首に跨って指示を出し、ジャングルを進んでみました。ゾウに指示するときは、指示の言葉の他に、耳の裏を軽く蹴ることで前へ進むことを促します。これが結構疲れるので、1日3〜4時間跨るだけでもヘトヘトに。マイペースなペーンちゃんは急に立ち止まったり、近くの草を間食したりとなかなか指示通りに動いてくれないのですが、マホートさんが下からサポートしてくれるので自分がペーンちゃんを操れているような気分（錯覚）を味わえます。ちなみに道草を食つてるときは「ヤーヤー！（止めなさい）」と言ってやめさせます。

来てきたそうです。  
**いよいよゾウ使いに！**  
**担当したゾウの名はペーンちゃん**

緑豊かなジャングルとちよつとしたスリルを満喫したあとは、汚れてもいい服装（貸してくれまます）に着替え、ゾウ使いのレクチャー。「パイ（進め）」「パイ・クウワ（右に行け）」「ナング（おすわり）」「ブンブン（噴水）」といったゾウを操るための言葉（ラオス語）を短い時間のなかで必死に覚えます。併設レストランでの昼食を終えてからは、

いよいよ自分がマホートです。私が担当したゾウはペーンちゃん（♀35歳）。ちなみにゾウは100歳くらいまで生きるそうなので、ペーンちゃんは人間で言うところのピチピチの20代女子？ 人間に置き換えると親近感が湧きますね。



手作り感たっぷりのマホート・エコ・ロッジの室内



デッキチェアでのんびり

再び、キャンプに戻ってからは水浴びの時間で、近くのカン川までペーンちゃんを誘導して仲良く一緒に「入浴」。土で汚れた体を適当に洗ってあげるのですが、「噴射」の指示を出すと、汲み上げた川の水を鼻から噴射してくれます！ おかげでビショ濡れですが、これも気持ちいいものです。ゾウさんたちは「お風呂」の中でも用を足してしまうので、あまり川のなかに浸かりたくはないのですが……。

夕方にはペーンちゃんをジャングルのなかにあるねぐらへ帰してあげます。その道ももちろん、自分がマホートとなって誘導します。隆起した巨大な岩山を眺めながら、山道をゆつくりと進みます。

ペーンちゃんとお別れしてから、渡し舟

でカン川を渡り、併設された宿泊施設マホート・エコ・ロッジに宿泊しました。

このマホート・エコ・ロッジはすべて一部屋ごとに独立した高床式のバンガロー。ムア・ロッジからはカン川を挟んだ対岸にあるので、渡し舟で向かいます。周辺は山と川に囲まれ、他にお店もホテルもない静かな環境で、夜に聞こえてくるのは虫の音と川の流れる音だけ！ ラオスの伝統的な高床式住居をイメージした木造のバンガローなので、とても簡素なつくりです。周囲の自然を楽しむためにテレビ、電話、無線LAN、冷蔵庫など現代的な家電製品は置いてません。

驚いたのはトイレの洗浄水が黄土色だった



冒険心がくすぐられる立地と外観です



ペーンちゃんともお別れ！



アンリ・ムーオの墓



何と勇ましい石像まで！



ねぐらに帰るペーンちゃん

たこと！決して汚い水ではなく、川の水をそのまま使用しているのだとか。周辺の環境を生かしている点がエコロッジたる所以です。また、近くの村に住む少数民族の方々を雇用するなどの配慮もあります。

翌日はちょっと早起きしてペーンちゃん

をねぐらまで迎えに行きます。いい子で待っていてくれたペーンちゃん。2日間同じゾウと一緒に愛着も湧きます。朝のひと風呂ということで昨日と同じく水浴びへ。今日も引き続きゾウ使い体験ですが、気のせいか昨日よりも言うことを聞いてくれているような……。「ナンゲ（おすわり）」など発音が難しい言葉はなかなか通じませんでした。左右に曲がるのもうバツチリ。自分にはマホートの素質がある！と自惚れるほど上達した気がしまし

た。 ロッジの名にひそむ フランス人探検家の物語 さて、突然ですがムーア・ロッジという名前の由来についてお話ししたいと思います。ロッジの近くにとある有名な探検家のお墓があるのです。そのお墓はジャングルの中にひっそりと佇んでおり、白い墓石が神聖な雰囲気をかもし出しています。墓石に彫られた名前は「アンリ・ムーオ」。1860年にカンボジアのアンコール・ワットを「発見」したフランス人です。

ただ、「発見」というのは西洋からの視点での話で、アンコール・ワットは12世紀から存在し、江戸時代には日本人も訪れていますから、「アンコール・ワットを西洋に紹介した」と言った方が正確なのでしょう。確かにムーオの紹介により、アンコール・ワットの存在は世界中広く知られることとなりました。そのムーオが最後に行き着いた場所がルアンパバーンというの意外ですが、彼が最後にルアンパバーンで何を見たのか、どのような想いで息絶えたのか、しばし思いを馳せる機会になりました。ロッジは、ムーオの墓の近くにあることから、ムーア・ロッジと呼ばれるようになったそうです。一見すると何もなさそうな大自然のなかにも、長い歴史物語の一端が眠っていたのです。

2日目の午後、いよいよペーンちゃんともお別れのとかがやってきました。最後は言うことも聞いてくれるようになったペーンちゃん。2日間も一緒だったのでお別れが名残惜しい！そもそも観光客がこんなにもゾウとふれ合えるのは本当に貴重です。しかもラオスののんびりとした自然も満喫できるこの場所、絶対オススメですよ！

「一番好きな動物はゾウ！」と言えること間違いなしですよ。

(2011年11月)